

アイアンワーク

鉄などの金属を、熱を加えて曲げたり捻ったりして様々な工夫を凝らし、デザインされた手仕事。手摺や門扉、軒受などに多く見られる。

アーチ

石造りや煉瓦造りといった組構造において、2つの点に架かって効率良く荷重を伝え、より長い距離を得るための曲線を用いた構造。丸アーチ、尖塔アーチ、葉形のアーチなどその種類は多岐にわたる。日本では「西洋風」の象徴として装飾的なモチーフになっている場合もある。

アールデコ調

「デコ」は仏語の「décoratifs」の略称で、直訳すると「装飾美術」となる。1925年のアール・デコ博にもとない、幾何学的なデザインが取り入れられていることが特徴といえるが、その様相は多様で限定しづらいため、アールデコ「調」と呼ばれることが多い。

エントランス柱

幅が中央部で膨らみ上部に向かって細くなって変化していく表現を用いた柱。垂直に安定して見える、実際よりも背が高く見えるといった視覚的効果がある。古代ギリシャ神殿の柱での表現が最も古いが、法隆寺の柱にもみられ、起源はどちらにあるのか明確ではない。

ギャンブレル屋根

切妻屋根の各面が一度折れ曲がり、2段階に勾配をつけた屋根。よく似ているマンサード屋根は2段勾配の寄棟。

コロニアル風

正面にエントランスポーチが付き、大きな開口部やベランダがあり、板を横に張った壁（下見板張り）などが特徴の建物。17～18世紀のイギリス・スペイン・オランダの植民地（コロニー）に多くつくられた建物が原型となり、アメリカでの様々な発展を経て、開国したばかりの明治の日本に輸入された。

小屋組

建物の屋根を支える構造。材料や手法に建物独自の創意工夫が見られる。なお、小屋組には、洋小屋組と和小屋組がある。

下見板張り

建物を雨や風などの天候から守るため、丈の長い板を水平方向に少しずつ重ねて外壁を覆う

手法。板の重なりによって生まれる陰影やリズムが建物の外観を特徴付ける。西洋が発祥の手法で、日本の近代化とともに取り入れられ、県内でも各所で見られる。

人造石洗い出し

壁面を天然石のように見せる左官仕上げのひとつ。表出させたい骨材（砕いた石や玉砂利など）をコンクリートやモルタルに混ぜて壁に塗りつけ、固まる直前に表面を水で洗い落として骨材を浮き上がらせる手法。

スクラッチタイル張り

タイルの表面をひっかく（スクラッチ）ように平行な溝を無数につけたタイルを外壁などに用いること。溝の深さや幅、数などによって様々な表情をみせている。

スパニッシュ瓦

またはスペイン瓦やミッション系とも呼ばれる。スペインを中心に多く見られる半円形をした瓦。凹状の下丸瓦と凸状の上丸瓦を組み合わせて屋根に葺いていく。大正時代の終わりに日本に輸入されたと言われている。

袖蔵形式

町屋の建物に多く見られる、主屋に隣接して蔵を併せ持つ形式。袖蔵は風がよく吹いてくる方角に建てられ、火災の時に火が主屋に燃え移るのを遅らせる役割も兼ねている。

軒受

外壁から飛び出した屋根や軒を支えるために用いられる部材。金属等で装飾的につくられることが多い。

ペディメント

窓や扉などの上部や、エントランスの屋根などに配されることが多い、緩い勾配の三角形をした切妻部分。古代ギリシャの神殿を起源とするため、建物の正面性を強調したり、格式の高さを象徴する要素として用いられる。

ルネサンス様式

15～17世紀にイタリアを中心に多くつくられた、古代ローマの建築を規範として再生（ルネサンス）しようとした様式。立面や平面が左右対称につくられ、古代ローマ建築にみられた円柱やアーチが取り入れられることが特徴といえる。

